大錦閑田曙 第二編
伊東專三者
前嶋和猶補綴
梅堂國政画
尼田彫秀
金松堂梓
上
中
下

八錦岡田曙
第二編
上

A468
6

水錦隅田曙第二編自序

暴よ物せ〜水の錦い。書房ゲ需よ應ぜ〜まゥく。耻ゥぐやゥ〜き所業ゐ是ど。初篇の筆を採〜のこゥ。我面白の人喧〜具眼の方ゥ云へを更ゐゥ。幼児女もゥは遣り捨ら是。水野の流ま絶果ゥい。隅田の塘の長々と。言の葉草の繁ゥみ〜ゥ〜ゥと。吾儕の愚筆と顧を居ゥ〜ゲ。僥倖ゥ〜て愛顧と賜ゥ。後ハ如何ぞ二編ハ出ぢやと。陸續作せゥ有難〜と。書房ハ特よ雀翻ゐ〜。嗣編を書舘の注文ハ。嬉〜ゥまゥみ気ゥ乗て。夜延仕事よ禿筆押採ゥ。先づ此稿を果せゥと。腹の打幕ゥち開て。序文ゥ〜ゥ〜言を述る

明治十二年己卯五月

橋塘 伊東專三

48-8154

○庁瀬六三郎
○尾張屋喜右衛門

再出
○藝妓おまん
○鎌田庄次郎
本名なり

二編上のまき

備もおまへの嬢と来
越元浦く表へ出れ
ど差て行方も定め
ぬが吉郷の平井村へ
転たて暫くその身と
悪ごんとひとをり不
をり行た小村井村
まで来り此処震面
をする曲者ぶん六人
現れ出て名自抜刀を内う威し文
句と並べしく金とのひあべ切拵ん勢ひの大屋班
をく懐中の金二両と渡しやりを場を脱とて

▲平井村の初巳の家へ来て伺ふまで
交ふをべきふはうぎ見の伺ふ行んのと
来たる巳みん掛るみけ云人の伝しふ笑ふ
上物金の振ひく行戸より▲

▲とぎく雲者嫁よ
行く者もあるこの一会
彼地へ来ん後ち嫁
ぎをぐらみ者を悪

▲ちんとかの路用を金倘よ

つゞき

もひよとて上総へ
新宅郭町ふるる智色と
優りて手練へ座附の藝
妓と名のて出る処鄙まへ
孫ハ美貌を見べ出る
の咲さと名く孫に
の後乃も亦ハ彩く妻
成るゞ玄面見ゞ
寿玉屋乗ら くよ
者ゞも掛ハ上と思ひ
るゞくも一年ゞろう孫加
く月日へ玉ふろう備妙
ちもと咲ゞ実人も名き中ふ

六

揚そ来
玉六ゞ弟う
と知そ玉ふ絶ゞ
ゞ沢さん
国方内

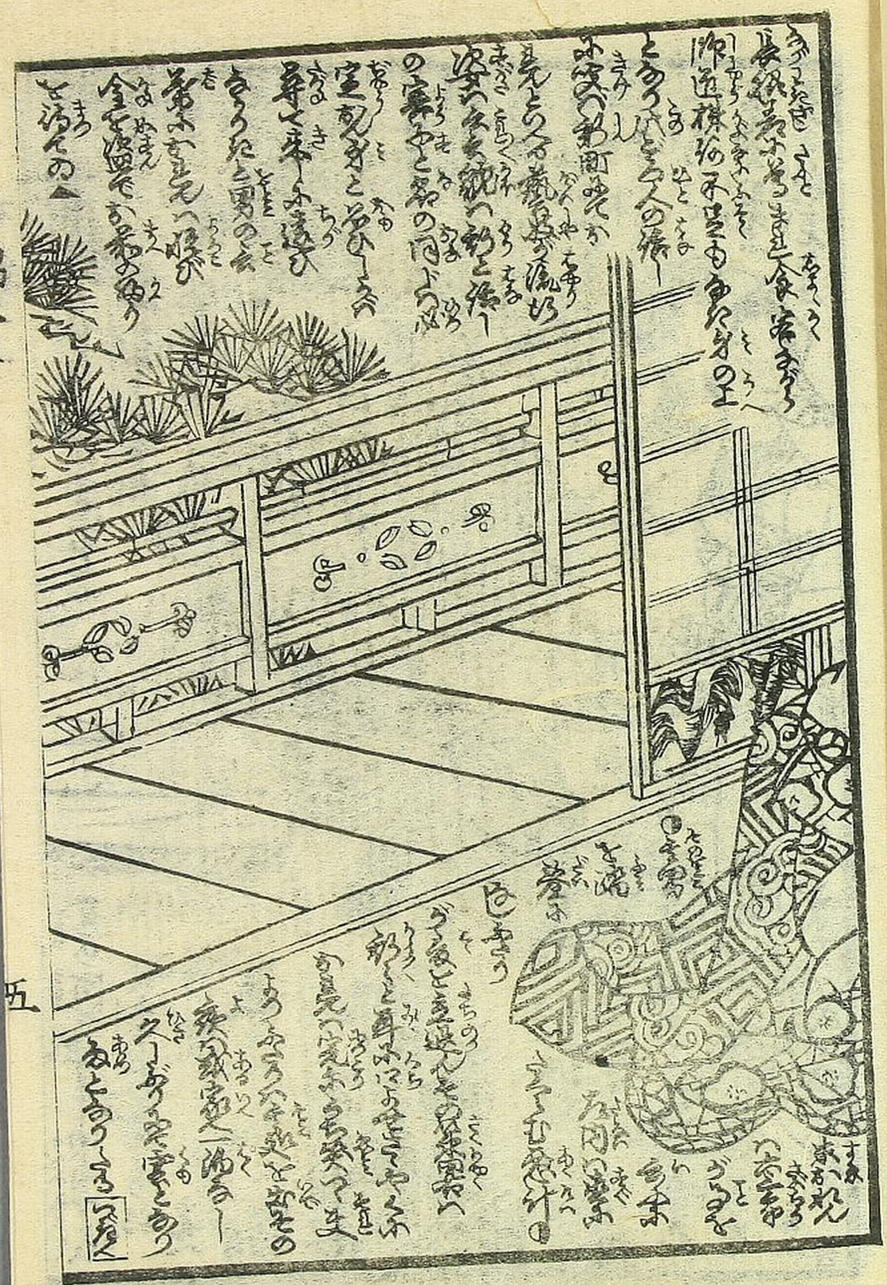
辺村字天村の農丈庄次
右衛門の姪六三郎ゞかまんふ
深く恋慕ハ大業樓と云ふ
料理屋へ毎日の出ふ咲上
て酒宴の除後と屋世孫
世ゞ発ゞ南と挑掛ゞ丞

左

▲飛くと云ゞ言易ふ飛ゞ
優ゞ紀会系の糸柳糸ふひ玉ゞ六ゞ東八塩ゞ
ふ

ゞ
ゞ
ゞ

左



水

三編上の巻終

官許 朝鮮名法 牛肉丸

大包代一朱五銭
中包代十二銭五厘
小包代六銭二厘五毛

官許 たんせきの薬 天恭丸

一包代六銭二厘五毛

此天恭丸ハ薬効ハ一たんせきの。ぜんそく。ひきつけ。ぜんそく。ひきつけ。ぜんそく。ひきつけ。ぜんそく。ひきつけ。小児百日ぜきに一切のせきに用ひて功能速やかなる薬にて絶出来ず候

出板御届明治三十二年五月八日

武蔵国荒川区三番地
出板人 伊東專三郎方同居
日本橋区横山町三丁目二番地
出板人 辻岡文助

文地本錦繪問屋 金松堂

010190510994

伊東專三郎
前嶋和稿補綴

A468
5

水滸画譜

就海中の巻

伊東專三著
前野丈鶴補綴
梅堂国政画
金松堂梓

48-8155

二編中の巻

山間僻地の湯が宅

▲始まりし文治を浪へ無戦

あてはかまろが夜中

なせーが寡を

盛りーを程立てやうく初り

治平

ゆうとも稼ぎ

稼ぎ

ーは出んとせー処へかまろは

見知らぬ武士と言よ吸り来る

ま安んーくまど不審はいふく

場のまろーが治平は早くも

水路を見てかりヨ教様うと

ゆ会まるよ水路も治平のかまろは

稼ぎたかまろは安べまくとろ銭

方の物語り光左衛門関ヶ原我も

上路へ入りー四五日彼処よ戦争の▲

▲成けりその

狭た内と

その四五日

かまんのは

ねも不審

のはろ

稼ぎさう

みなりそれが

我化も

武下

絶の

お京

へぎつ

水

作
治

つゞき

内の方へ泥棒入と大声とよるとゝ此人込と狂ふ方へ逃走るひとりの男へ小そでも知るゝ巻職金三ゝ右肉へ丈とこゝろのも行遠ひさま徳盤ゝ。ノット引つけ懐中へ入と入るゝ今奪ひ一と足ゝ立流るゝ紙入を拾ひ取さまべ文ゝ逃一

▲逃一さ四九ゝ一寸と一杯美上さ一行粋まれ出ゝ私とそ人おどーと氏金のみ今みゝ福らゝ人物中ゝ結ゝの種ふゝ

もやせんと男ひ

ゝ人の空雑義

も空ゝよりゝ

ゝ南お花

ゝ同所の料理屋

浅草観音年市廻景況

新界隈へ出るゝ

その場人酒肴も

ゝで男のゝ

ゝ私ゝ

経仕舞者町

の呉服屋

尾張屋

右衛門

ゝ者でゝ

ゝ人ゝ

ゝ紙入と逃

ゝ出ゝ紙入とゝ

逃一ゝ

ゝ雑人

ゝ肉も私と逃一

ゝ田舎の人

ゝ雑踏の中ゝ

ゝ人ゝ

ゝ物と

ゝ人と紙入と逃

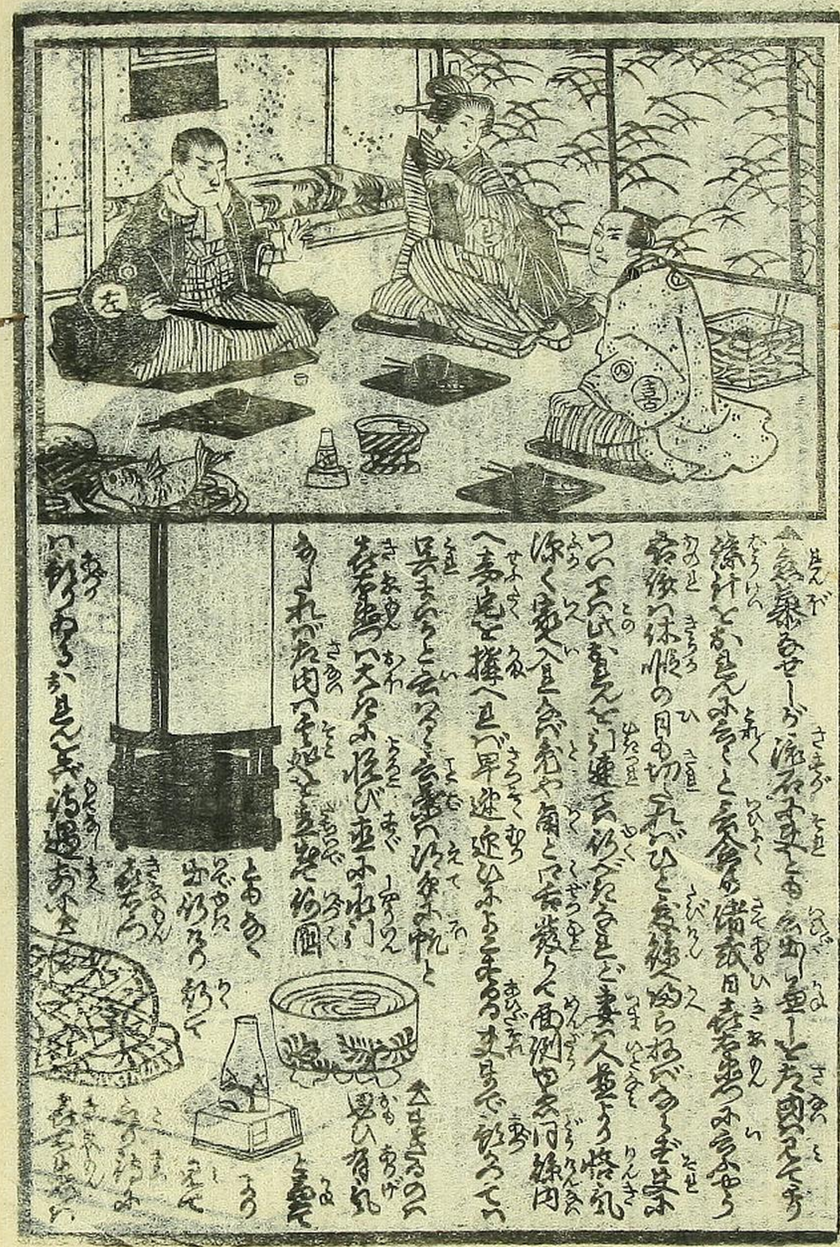
ゝ男ゝ

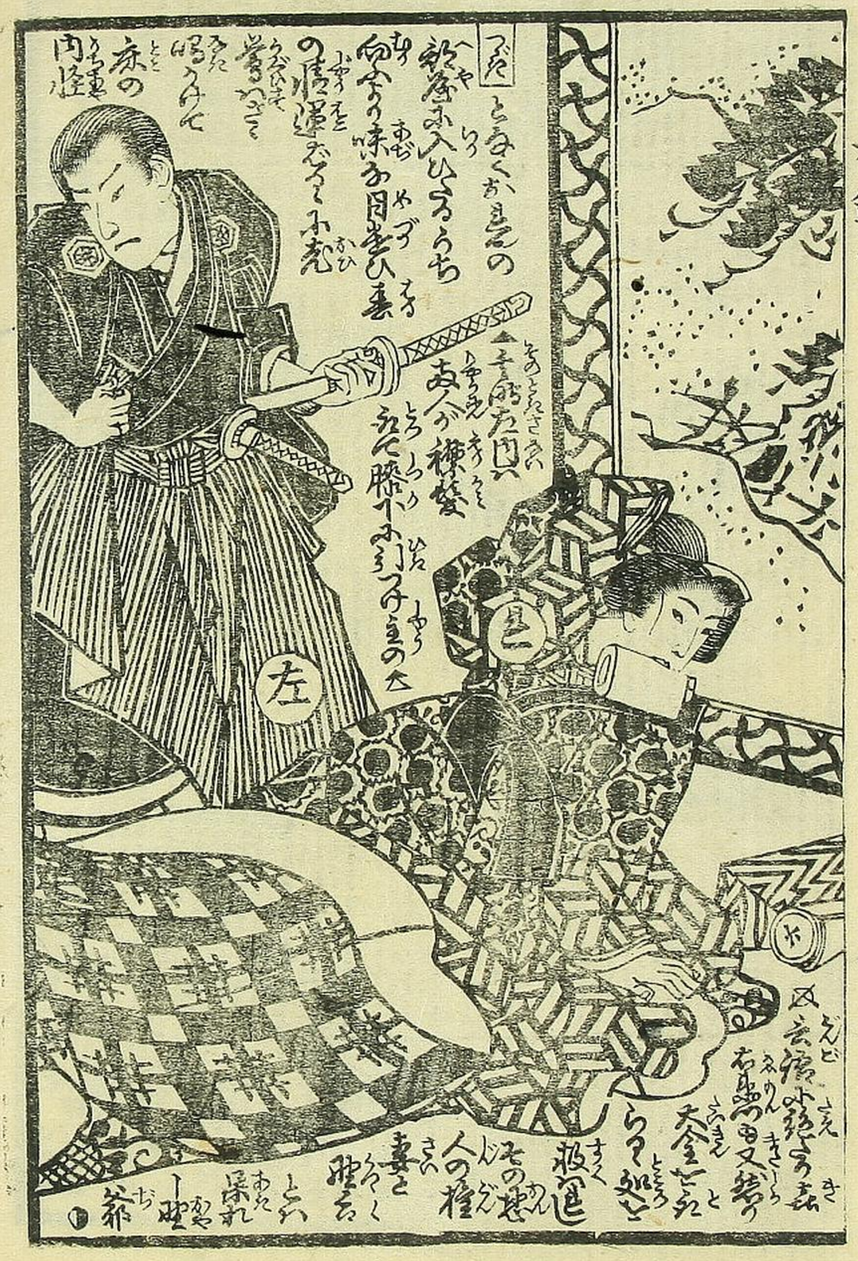
ゝ仕せのゝ田舎ゝ仕込

ゝ市へ

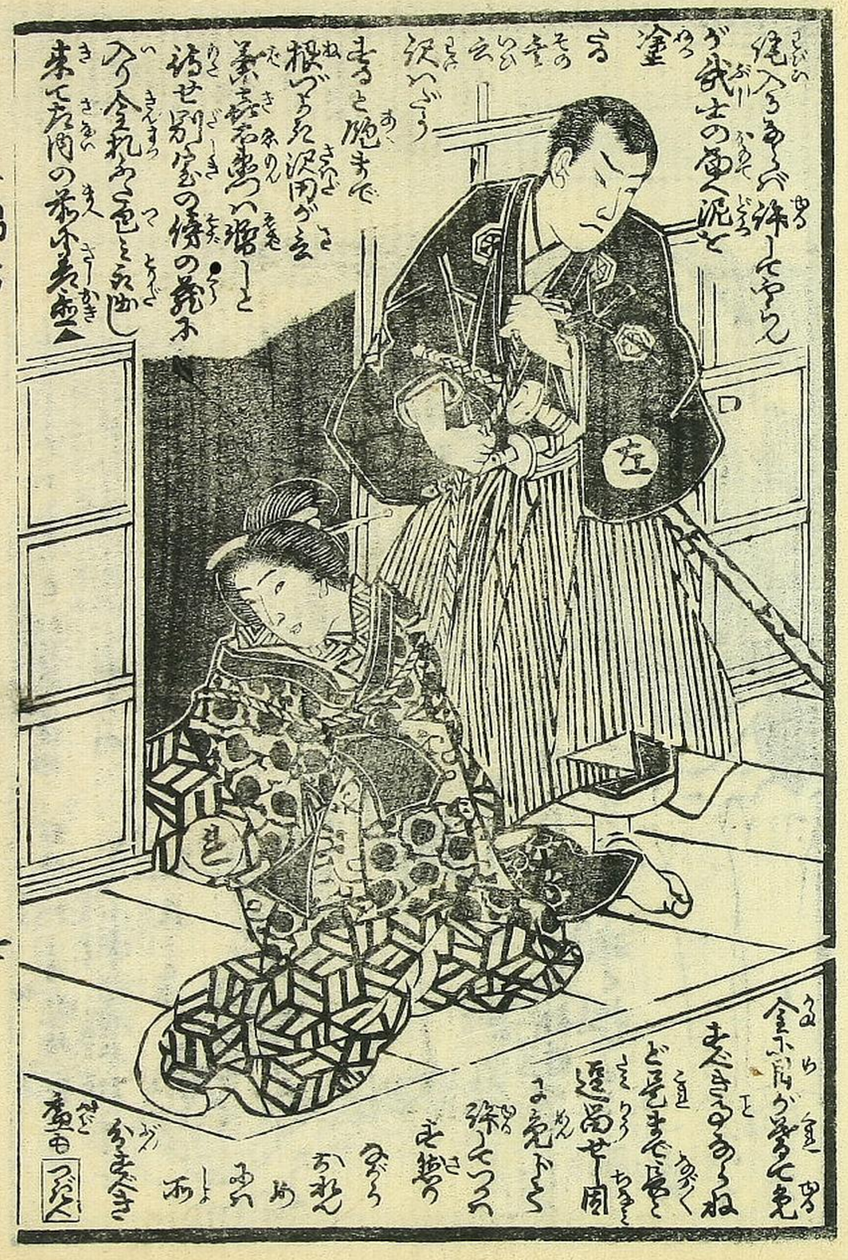
ゝ中ゝ百円

ゝ逃入ゝ

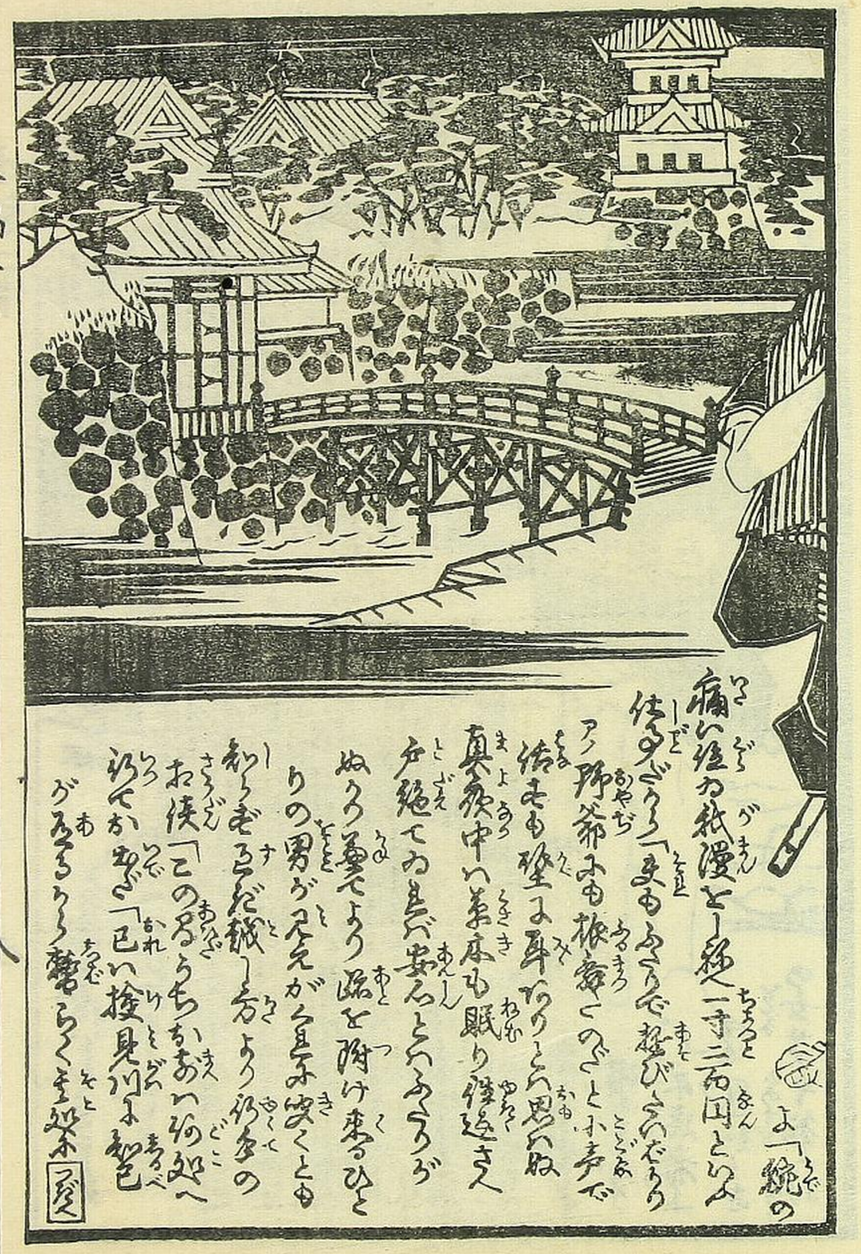



左
三
下

喜

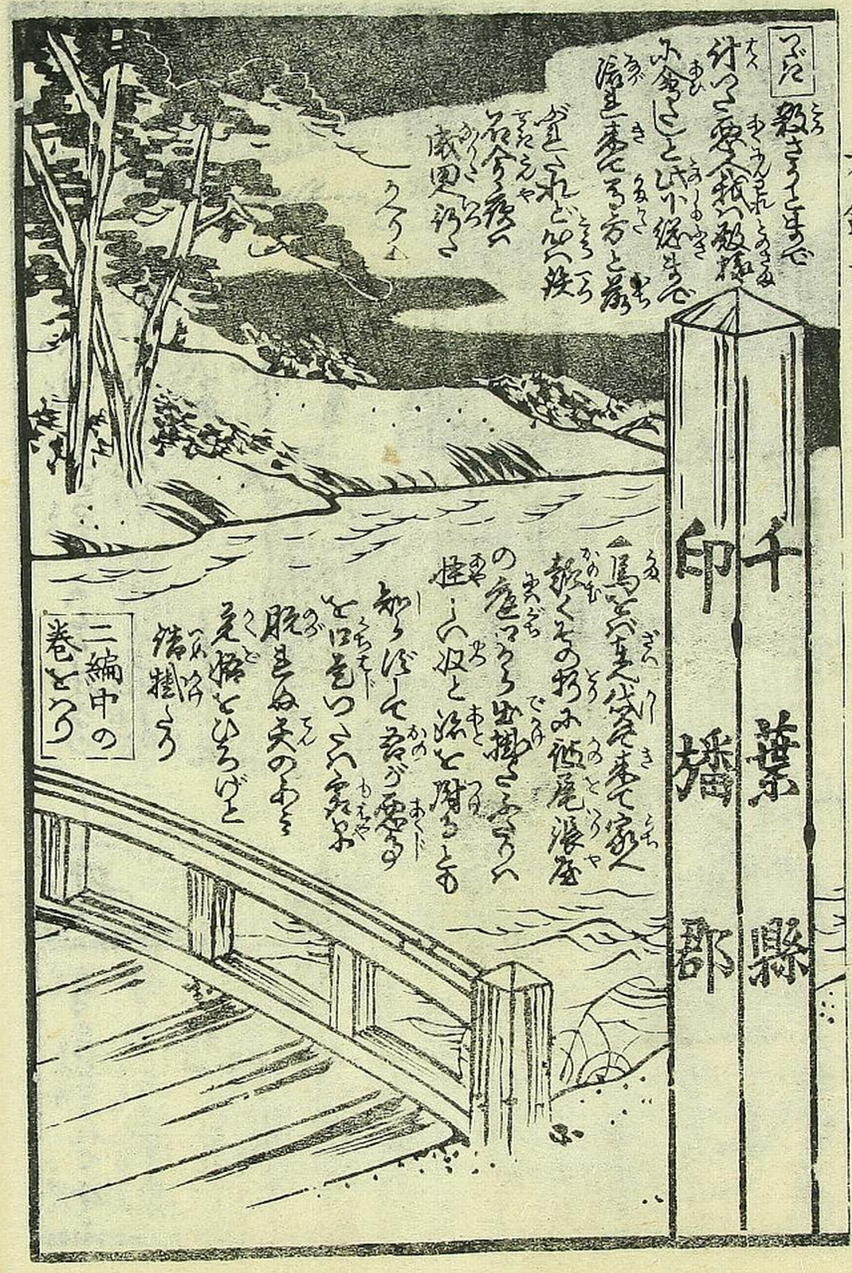


つゞき
なるほど
連れなくあり
とかの
か緒で
ぐるく
もつた
▲サアらも おろうとうまて 奥の
繁昌ぢる〜開つて出ぬくふろの
賑ふらげ▲
▲見送るうち
酒の花魁
左
丝
山寺の鐘牛お二階を
矢ごと
「ヲイお前が結く結てくろう 暁が
痛
ふさ
渦ら玄


痛い程の我慢と一緒に二寸三百円とい
結ぶぐろう「まもふろで整びさいだろう
アノ阿爺様も根掘葉掘のことホ声で
結まも堅よ耳ありとも思いね
真夜中いまも眠り後迄さ
戸絶ての長び安ろとふろうぐ
ぬろう墨でよう跡を附け来るひと
りの男ぐ正えが正体ぬくとも
新ぐ者ろだ賊ー方よろ多の
お使「この名ちちおいの処へ
ろてお出ぐ「已い捜見ぬ和色
ぐろろう馨らくを処本

左
源

文



銅版開化王編　全
島田豊三郎編
開化女用文章　全

芳川俊雄閲・永島孟斧画
夜嵐阿鬼怒花仇夢　五編
岡本勘造作　大尾

魯文作
金花七變化　三十一編マデ出板
國貞画　次編追々出板

秀賀作
濡衣女鳴神　十編
國貞画　大尾

滝崎延房編輯
近世紀聞　初編ヨリ十編迄出板
鮮齋永濯画　以下追々発兒

同編輯
義烈田天百首　全
同画

假名垣魯文編輯
高橋阿傳夜叉譚　八編
守川周重画　大尾

出板御届明治十一年五月八日
浅草花川戸一番地
伊東彦三郎方同居
編輯人　伊東專三
日本橋區横山町三丁目二番地
出板人　辻岡文助

文地本錦繪問屋
金松堂

010190511001

ابن حزم

梅堂國政画
尼田彫秀
金松堂梓
下

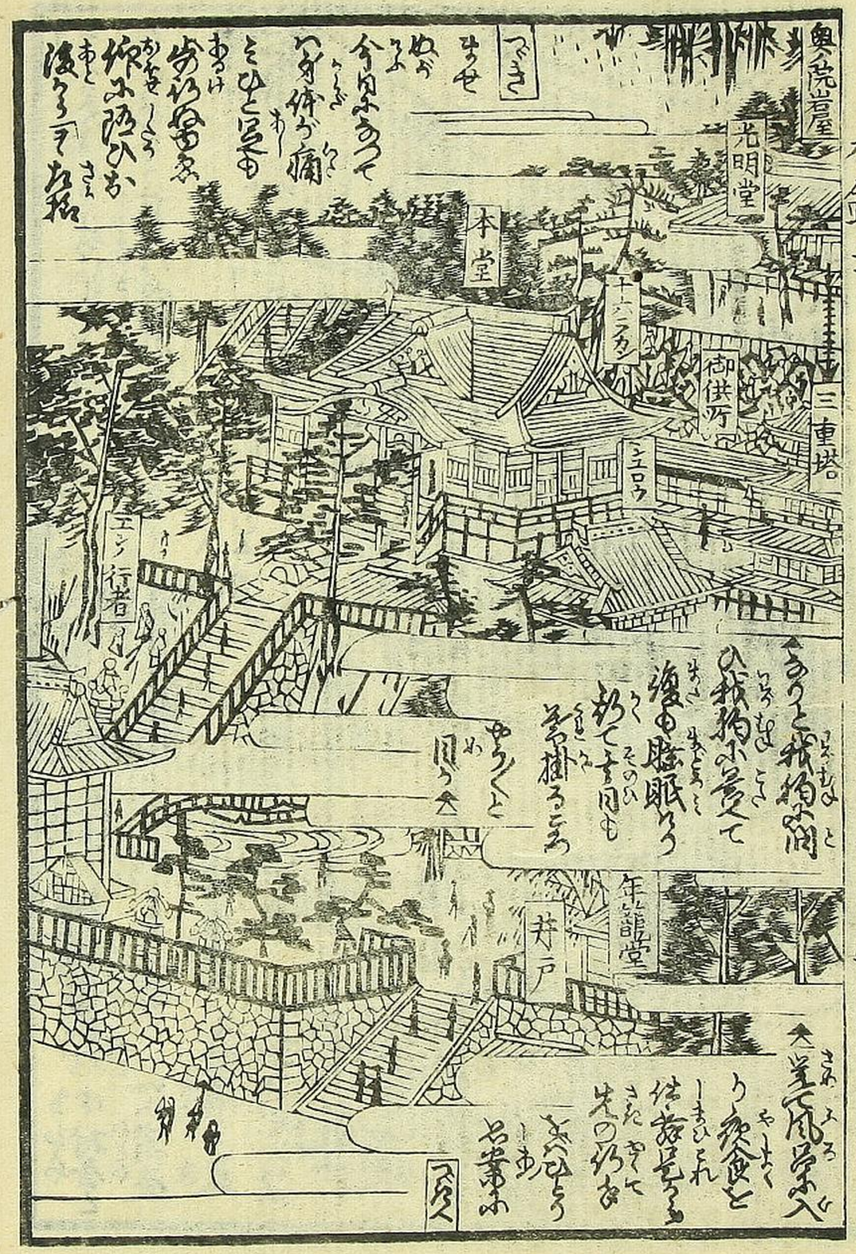
A468
6

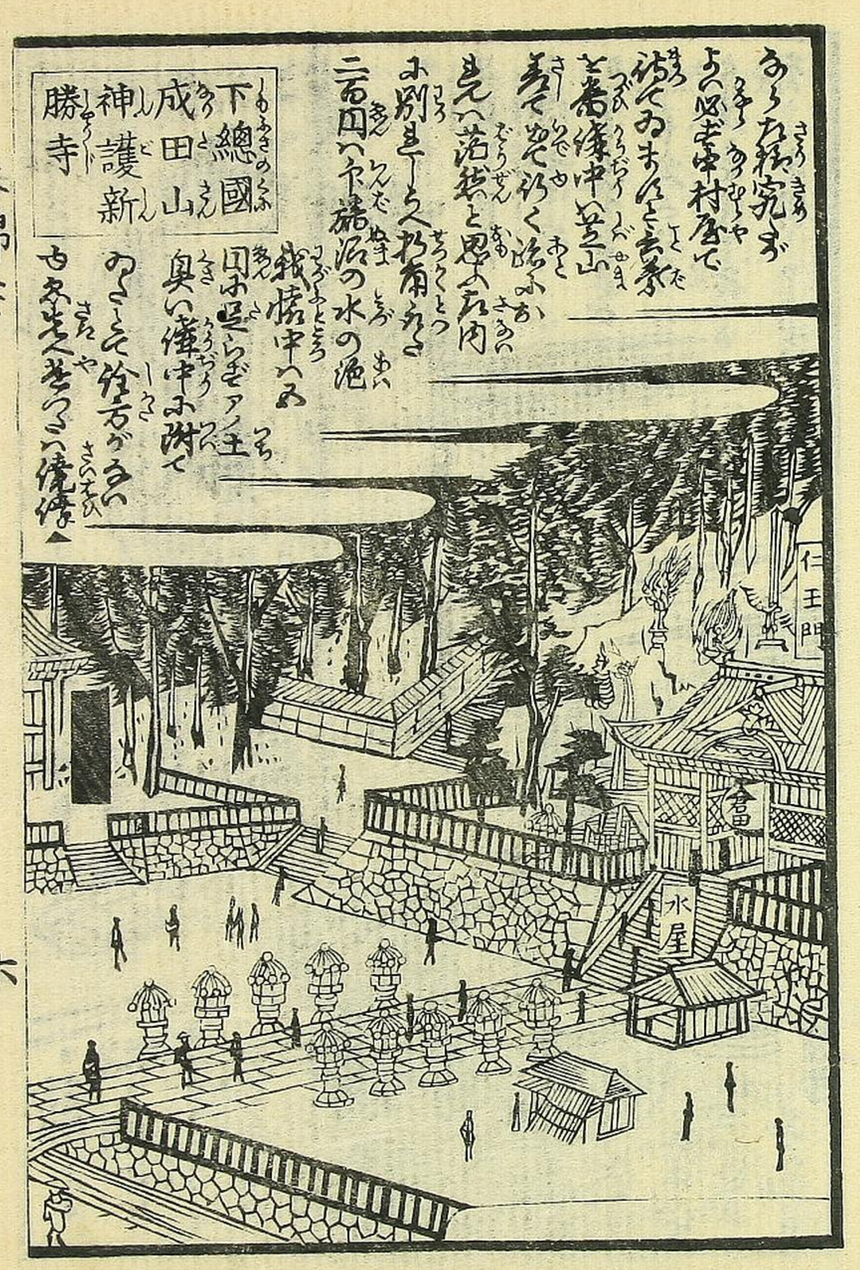
48-8156

つゞき
ホッ
ト
ひと息
助けてやさのく
と文吾をよし
文

ぐく
未練
ぶと
辨い
嬉
成田者
の早立
羽
涙
「私ゝ
見ぬ夫と
思ふ
寄ん
仕の
男と
連立
別れ
仕舞
へ
男ハ
妻ハ
文

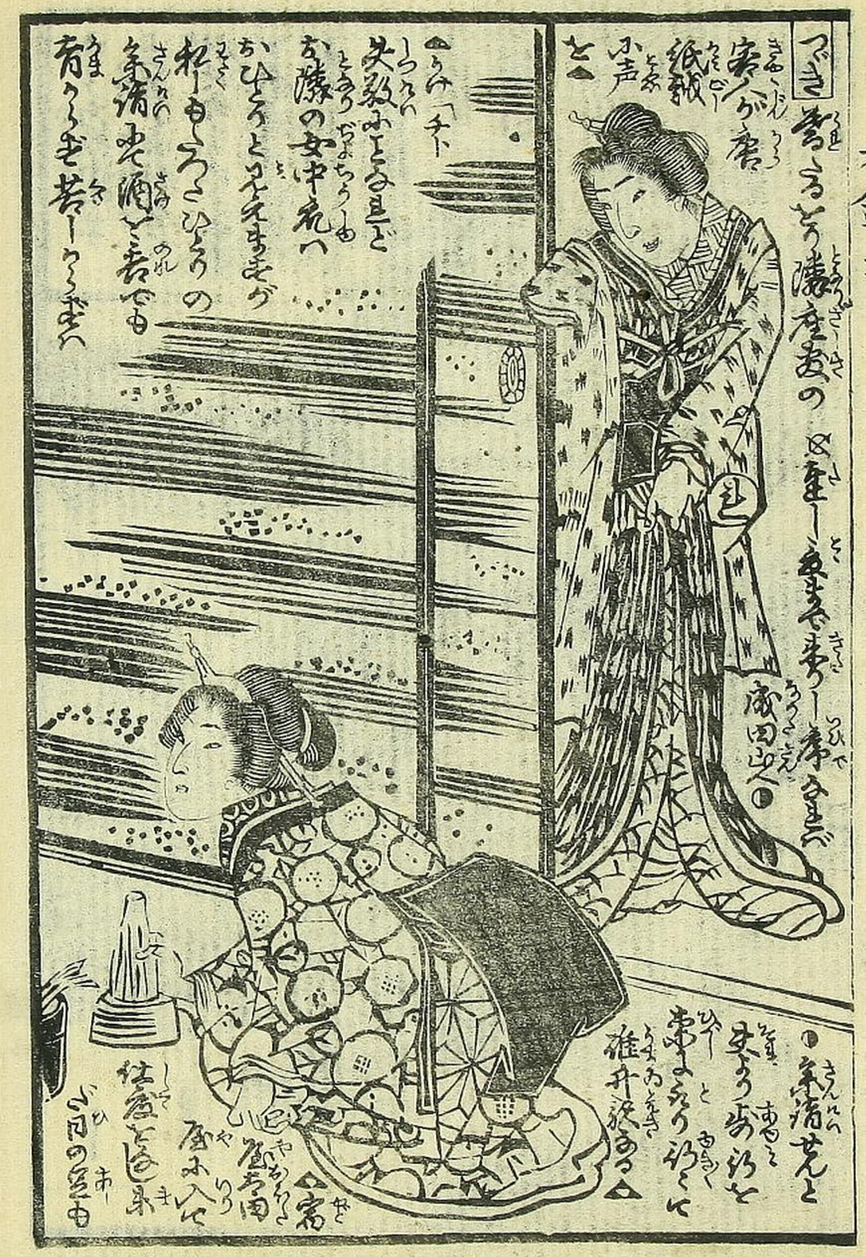
でき
手とねがひ
不動
極へ
来給ふ
ぢ
まで
ぢ
ぢ
ぢ





下總國
成田山
神護新
勝寺

つゞき


家内が書紙
小声
と
ちみ「チト
失敬ながら
お藤の女中衆へ
おひろとりそもぐ
和一もろさひろの
糸清屋酒と表でも
育ちも若ーちぶん
糸清せんと
まろう安ろを
帯よりろ行くに
雅升屋あり
常
佳屋と屋号
屋号用
屋号入れ
ゴ用の品目

和一方へお入れ一ツ
ちろくに出ないでもと
長ぜ方へ初くーく「ひとる
雅き仰ゲ多ぜ教方かひろのも
処へ女の子とーてぞうマアと解き
と聞ぬも酒のう「イヤ生酒を
表へ入らぬと先此方へと書
紙と引出てあとちろ己が性愛へ
俗へ初めて武男とちくるる年のころ二十
三を角くと分海の立流文ぞろ徒ずの種みの
ものんと早くも用里を消さろる「変ぶ水鳥
女婦へ計らでもや徳淀村出毎舎せーちろ
横ら活ーしの出貝山面の家ぶ逆角(ム)五個ゴ
用事と
正
ちろれば成田
日酒ふ
もと
あとえ一
寿

作

成田山
水
治

朝鮮官許
牛肉丸
大包代二十五錢
中包代十二錢五厘
小包代六錢二厘五毫

たんせきの業
官許
天恭丸
一包代六錢二厘五毫

出板御届明治十一年五月八日
地本錦繪問屋
文金松堂
出板人 辻岡文助
浅草花川戸二番地
繪職人 伊東專三
日本橋區横山町三丁目二番地

010190511010

水錦（みづのにしき）隅田（すだ）の曙（あけぼの）

第貳篇

伊東專三著
前嶋和樵補綴
梅堂國政畫

金松堂壽梓